

## あしよろ・ハードサポート通信

足寄の皆様、こんにちは。ハードサポート株式会社の市川雷太です。

朝晩の冷え込みも厳しくなり、徐々に冬の足音が聞こえてきました。例年この時期は削蹄を行うと、蹄病、特に蹄底潰瘍が見られる事が多いです。

### ◆ 蹄の構造と削蹄の必要性

図①は蹄の断面を簡単に示したものです。蹄骨を覆うように外側から蹄底角質、蹄底真皮、そしてクッションの役割を持つ蹄球枕があります。

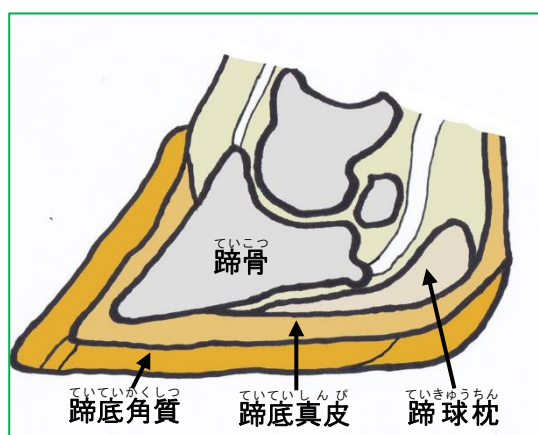
通常、蹄の角質部分は1か月に約5mm伸び、自由放牧の牛では蹄の伸びる速さと摩耗する速さがほぼ同じと言われています。しかし繋ぎ飼いや通路にマットを敷いている場合、また栄養供給レベルが高いときには、蹄が伸びすぎる傾向にあります。

蹄が伸びすぎると、蹄が後ろへ傾いてしまうことによって、蹄骨が蹄底真皮を圧迫し、蹄病のリスクが高まります(図②)。

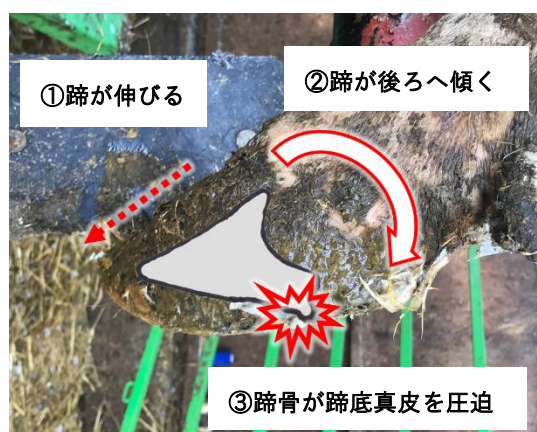
蹄は牛ごとに伸び方も異なるので、牛が立ちやすく歩きやすい状態をつくるためには削蹄を行って蹄の形状と負重のバランスを整えることが必須です。従来は年2回の定期的な削蹄が一般的でしたが、最近では年3回以上の削蹄が推奨されています。

長期間削蹄をしなかった場合や、著しい負重バランスの偏り、また蹄病の発生などによって、蹄が大きく変形する事があります。図③は極端な例ですが、このような状況になってしまうと牛の生産性も低下し、また1回の削蹄では矯正が難しくなります。

図① 蹄断面の模式図



図② 蹄が伸びすぎると・・・？



図③ 変形蹄（鉗状蹄）



### ◆ 秋に蹄底潰瘍はなぜ多い？

9－10月に削蹄を行うと、蹄底潰瘍が多く発見されることがあります。ここで注意しなければならないのは、蹄底潰瘍は削蹄を行った現在ではなく、1か月半から2か月前に問題があったことを示す「結果」であるということです。

今年是比较的過ごしやすい夏でしたが、牛が暑熱ストレスを受けると立っている時間が長くなり、涼しい時間帯に採食しようとするので固め喰いとルーメンアシドーシスのリスクが高まります。また、湿潤な気候で蹄自体が軟化しやすくなります。したがって、夏場は他の季節よりも蹄底潰瘍になる可能性が高く、それが秋になって発見されることが多いのです。

重度の蹄底潰瘍



### ◆ 蹄底潰瘍の主な予防策

- ◇年3回以上の削蹄を行い、蹄にかかる負重が常に適切になるようにする
- ◇ルーメンアシドーシスリスクを避けた飼料給与を行う
- ◇起立時間の延長を防ぐため、牛床などのカウコンフォート面を注意する
- ◇夏場の暑熱ストレス対策を行う
- ◇趾皮膚炎（DD）など他の蹄病を予防する
- ◇牛が痩せると蹄底潰瘍のリスクが高くなるので、ボディコンディションを適切にコントロールする

### ◆ まずは削蹄を！

牛は足が痛いとき大きなストレスを感じ、エサを食べる、水を飲む、寝るなどの行動が制限され、その結果、乳生産や繁殖成績へ大きな悪影響を及ぼします。

蹄病の発生には様々な要因が関わっていますが、適切な削蹄をすることで蹄病の予防になり、また蹄病を早期発見することで慢性化や重篤化を避けることができます。

もし現在蹄病にお悩みであれば、早期発見と治療はもちろんですが、削蹄の頻度を上げることも強くおすすめします。

（市川雷太）



- 
- ・11/14（水）の第4回酪農女性勉強会では、町内での牧場視察を予定しています。視察先などの詳細は後日FAXにてご連絡します。ぜひご参加ください。